

大学生および成人を対象とした男性同性愛者に対する意識について － 当事者による講演会の参加前後の比較から －

The consciousness for the male homosexual for university student and adults.
－ The comparison before and after the lecture by a person concerned －

佐々木直美*
Naomi Sasaki

要約

最近では以前に比べてニュースやテレビ番組でセクシュアル・マイノリティが取り上げられることが増えたが、セクシュアル・マイノリティに対する知識の不確かや曖昧さは未だ多いと推測される。そこで本研究では、大学内で実施する男性同性愛者当事者による講演会に参加することが男性同性愛者に対するイメージの変容につながるかどうかについて検討を行った。対象は、A県の大学生、学内の教職員および外部の保健センター職員であり、講演会への参加は自由意志とした。講演会の構成は、同性愛者に対する対応の仕方に関する講演会や当事者2名による人生の振り返りに関する対談が中心であった。まず、同性愛に関するイメージ尺度の因子分析を行った結果、「危険さ」「身近さ」「幸福さ」の3因子が抽出された。それを用いて講演会の参加前後でイメージの比較を行った結果、大学生もそれ以外の職員も講演会後では危険さが減少し、身近さと幸福さが増していた。また講演会での学びが今後どのように活かせるかに関する自由記述では、「人も性も多様であることを認める」、「同性愛者を尊重し、理解ある態度で接することができる」といった性の多様性の理解や同性愛者への適切な対応や、「友人・他者にも同性愛者への関わり方や理解を伝える」、「セクシュアル・マイノリティ理解のための社会啓発活動への意欲」といった他者や社会に同性愛に関して正しい理解を求める態度などが見受けられた。

キーワード：セクシュアル・マイノリティ、LGBT、男性同性愛者、当事者講演会

Summary

Recently, it is increased that sexual-minority is taken up by news and a TV program compared with before recently. But it is supposed if there are still many uncertainty and vagueness of the knowledge for sexual-minority. Therefore, in this study, it examined the transformation of the image for the male homosexual to attend the lecture by the person concerned. Participants were the university students in A prefecture, teaching staffs member on campus and health center staffs of the university. The participation in the lecture was free will. The manner of the correspondence to a homosexual and the life review by 2 persons concerned was a center for the construction of the lecture. First, as a result of having performed the factor analysis of the image scale about the homosexuality, 3 factors of "dangerousness" "familiarity" "happiness" were extracted. In the comparison before and after the lecture participation, the dangerousness decreased and the familiarity and the happiness increased in all participants after the lecture participation. In addition, from the free description that how learning in the lecture could be utilized in future, two following opinions were founded, for example. 1) Understanding of sexual diversity and appropriate correspondence to a homosexual: "It could be admitted that the

*山口県立大学看護栄養学部看護学科

*Department of Nursing and Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

individuality and the sexuality are various”, “It's possible to respect a homosexual and to meet by the sympathetic attitude.” 2) The attitude that promotes the appropriate understanding about the homosexuality for others and society: “How to concern to a homosexual and understanding are told to my friend and others.”, “The will to social enlightenment activity for sexual-minority understanding.”.

Key words

sexual-minority, LGBT, male homosexual, the lecture by the person concerned

I. 問題と目的

セクシュアル・マイノリティ（性的少数派）とは、①インターセックス・性分化疾患とよばれる「生物学的性」のマイノリティ、②トランスジェンダーとよばれる「性自認」のマイノリティ、③同性愛・両性愛・無性愛などの「性的指向」のマイノリティに分けられる（宮腰、2012）¹⁾。同性愛とは同性に対して性的に惹かれることである（女性の場合はレズビアン：Lesbian、男性の場合はゲイ：Gayと呼ぶ）。また、男女両性に対して性的に惹かれることを両性愛（バイセクシュアル：Bisexual）と呼ぶ（石丸、2008）²⁾。近年では、これにトランスジェンダー：Transgenderを含めて、それぞれの頭文字をとりLGBTと総称されることもある。最近では以前に比べてニュースやテレビ番組でLGBTが取り上げられることが増えたが、それに出演している人たちの容貌や態度、そしてイメージでLGBTを捉えている人も多く、LGBTに対する知識の不確かや曖昧さは未だ多いと推測される。西成ら（2012）³⁾は医学部学生を対象にセクシュアリティと性同一性障害に関するアンケートを行った。その結果、性同一性障害と同性愛を区別できるかという問いに対して、「区別できる」が22.5%、「なんとなく区別はできるが説明できない」が70%、「区別できない」が7.5%であり、二者の区別に関して曖昧な者が多数を占めたことを報告している。また、「性同一性障害にはまず精神療法で身体の性別に沿ったアイデンティティを獲得させるようにする」が誤っていると回答した者は66.3%に過ぎないことから、専門家の間では性自認の変更を目的とした精神療法は無効で倫理的にも容認されないことは常識であるが、一般には十分浸透していないのではと考察している。松本（2013）⁴⁾は、LGBT当事者は思春期を迎え意識するところになって自分のセクシュアリティの問題を意識にのぼらせ悩むようになることが多いことを挙

げ、多数者がある時期から異性に惹かれるのと同じくセクシュアリティは生得的なものであり、自己の意志で変更できるようなものではないと述べている。また性に目覚める以前に「性に関する感じ方がおかしい」、「倫理的・道徳的に間違っている」という感覚を刷り込まれると、後に自らがマイノリティであることを自覚した際に自尊感情が低くなってしまおうと指摘している。さらにこのような心理状態では、性に関する悩みを表に出さないことが多いため、医療関係者、特に精神保健や性感染症を扱う者は、この問題にアンテナを持ち、対応できる必要性を論じており、同性愛者やトランスジェンダーは自らの意志で人と違う性指向や性自認を「選んだ」のではなく、マジョリティーの男女の概念と同じくそのように「生まれた」ということを理解することが肝要であるとしている。これらの報告はLGBTに対して正しい理解を持ち受容的態度、対応を行うことが重要であることを示していると考えられる。正しい理解という観点では、山本ら（2012）⁵⁾は、大学生を対象に同性愛者との接触経験とイメージ形成、嫌悪態度を質問紙を用いて検討を行い、その結果、実際に当事者たちと関わりを持つことの意味は大きく、直接的な出会いは偏見を少なくする重要な要因であると考察し、教育現場で広くセクシュアリティについて触れる機会を設ける必要性を説いている。

これらのことから、LGBTについてより多くの人々が正しい知識や理解を持つことが望まれ、また偏見を少なくするためにも、当事者による講演会を実施し大学生がそれに参加する機会を持つ重要性が考えられた。当事者による講演会の効果についてはいくつか検討されている。河部ら（2007）⁶⁾は、看護過程展開の中で喉頭腫瘍の当事者参加型授業を行い、授業後の学生のレポートを分析することで、教育効果について検討した。当事者による講演の内容は食道発声の仕組み、命と引き換えに声を失うことの苦

悩、癌の告知を受けたときのショックなどであった。その結果、当事者の実体験を聴くことにより、①患者像と自己のイメージのギャップへの気づき、②これまでの看護の学びや概念を想起し目の前の現象と重ね、それぞれの概念の深い理解、③患者と看護師の関わりをの深さを再確認し看護学を学ぶ意志を促す効果があったと報告している。また、森川ら(2003)⁷⁾は、精神障害当事者による講演会に医療関係者・看護学生が参加し、講演会前後でアンケートを行い精神障害および当事者に対する捉え方の変化を検討した。その結果、医療関係者、看護学生ともに当事者の講演を聴くことで当事者に勇気づけられ、当事者の自己表出を歓迎するようになり、幻覚や妄想に対しても積極的に関わりたいと捉え方を変化させる効果があったと述べている。

そこで本研究では、大学生および同性愛者に関わる可能性がある学内の教職員、学外の保健センター職員を対象とし、大学内で実施する男性同性愛者当事者による講演会に参加することが男性同性愛者(以下ゲイ)に対するイメージの変容につながるかどうかについて検討を行った。

II. 方法

1. 対象：A県の大学生、学内の教職員および学外の保健センター職員。A県のB大学の学内で講演会に関する案内を掲示し、かつ授業後に学生に口頭で案内を行った。またA県内の保健センターには案内を送付した。講演会の参加は自由意志であり、参加費は無料であった。
2. 手続き：講演会内容の構成は表1の通りである。
3. 指標：講演会参加による意識の変化を捉えるため、講演会前後でアンケートを実施した。

Table1 講演会の内容

形式	内容	所要時間	講演者
アンケート記入		5分	
講義	生物学的性別、性自認、性指向は多様であることを紹介	5分	看護学科教員・臨床心理士
講義	同性愛者に対する対応の仕方(同性愛に対して正しい知識を持ち、個別性に留意しつつ、相手を受容する態度の重要性)、HIVや性感染症の予防(啓発活動の紹介)	20分	ゲイ当事者
フリートーク	「自分がゲイであることに気づいたときのきっかけやその時の気持ち」「周りに自分の性指向をカミングアウトしたときの状況、気持ち」「セクシャルマイノリティとして社会生活を送ることの大変さや難しさ」について、互いの人生の振り返りによる語り	40分	ゲイ当事者2名
講義	A県のHIV/エイズの動向とHIV抗体検査について紹介	7分	保健センター職員
質疑応答	講演の内容に関して質疑応答	5分	
アンケート記入		8分	

アンケート内容は、①ゲイに対するイメージをSD法9項目7件法で尋ねるもの(講演会参加前後において同一項目で調査)、②講演会に参加してみたいと思った理由(講演会参加前に自由記述で調査)、③講演会に参加した後のゲイに対する理解の深まり(講演会参加後に選択式で調査)、④講演会に参加する前と後で意識が変化した点(講演会参加後に自由記述で調査)、⑤講演会での学びが今後どのように活かせるか(講演会参加後に自由記述で調査)であった。なお①に関しては、岩下(1983)⁸⁾のパーソナリティ・イメージの因子分析結果の形容詞対や井上ら(1985)⁹⁾の主要な刺激概念における形容詞対や山本ら(2012)⁵⁾の同性愛者のイメージ測定に使用した形容詞対を参考にし、さらに大学生にLGBTに関してイメージする形容詞を自由に書かせ、その中から記述が多かったものを参考に作成した。

4. 分析方法：アンケート内容の①については講演会参加前のSDスケール9項目を対象に因子分析を行い、イメージ構造を明らかにした。その後、講演会参加前後のイメージの変化を検討するため分散分析を実施した。学生参加者と学内の教職員および学外の保健センター職員(以下成人)参加者でイメージの変化に差異があるかどうかを検討するために、講演会参加前後×学生・成人の2要因計画とした。統計分析にはSPSS Statistics 17.0を使用した。②～⑤の自由記述については記述を繰り返し読み、質的研究に詳しい心理学の専門家2名で内容分析を行った。

5. 倫理的配慮：アンケートへの協力は自由意志であること、無記名であり個人が特定されることはないこと、調査内容の取り扱い、今後の公表の予定についてアンケート内に記載し、口頭で説明した上で、

Table2 講演会に参加した理由

理由の要約	講演会に参加した理由（自由記述より）	人数
世の中の話題性への関心や参加の気軽さ、受動的態度	学内で行われるから	1
	案内ポスターを見たから	2
	友人からの誘いから	2
	教員からのすすめから	6
	テレビやニュースでLGBTが話題になっているから	3
同性愛に対する知識欲や関心の高さ	同性愛について正しい知識を得たかったから	10
	講演内容に関心があったから	11
	普段同性愛の方と接する機会がないから	15
自身や友人が同性愛者であることによる知識欲の高さ	自身が同性愛者のため現在の社会の現状、環境を自身のためにも知りたかったから	1
	友人が同性愛者のため関わり方の知識を得たいから	3
仕事に関連した知識欲の高さ	仕事で同性愛者に関わっている（関わる可能性がある）ため知識を得たいから	5
	将来の仕事で同性愛者に関わる可能性があるため知識を得たいから	5
同性愛に対する自身の偏見への問題意識や社会への啓発活動意欲の高さ	同性愛に関して自分の視野を広げたり偏見を変えたかったから	3
	社会の同性愛に関する現状を知り啓発活動に取り組みたいから	2

Table3 男性同性愛者に対するイメージの因子分析結果とα係数（N=54）最尤法、プロマックス回転後

	危険さ	身近さ	幸福さ	共通性
安全な－危険な	0.96	-0.09	-0.03	0.82
きれいな－汚い	0.69	0.03	-0.01	0.49
受け入れやすい－受け入れがたい	0.59	0.20	0.15	0.60
一般的な－特殊な	0.02	0.99	0.00	0.99
身近な－縁遠い	0.06	0.61	-0.04	0.41
生きやすい－生きづらい	0.23	0.39	-0.09	0.29
複雑な－単純な	-0.11	0.32	0.06	0.08
陽気な－陰気な	-0.07	0.08	0.99	0.99
自由な－不自由な	0.35	-0.19	0.37	0.26
累積寄与率（%）	26.80	40.28	54.80	
因子間相関		0.55	0.28	
			0.24	
適合度（χ ² ）	0.24		df=12, n.s.	
Cronbachのα係数		0.75		

同意を得たものについて分析対象とした。なお本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認を得て行った（承認番号27-46号）。

Ⅲ. 結果

1. 参加者および分析対象者

学生41名、成人13名の合計54名であった。

2. 講演会に参加してみたいと思った理由について

講演会に参加してみたいと思った理由について、講演会前において自由記述で回答を求めた。その結果が表2である。

3. ゲイに対する理解の深まり

講演会後にゲイに対する理解がどの程度深まったかについて、「参加前より深まった」、「参加前と

変わらない」、「その他」から選択させた。その結果、分析対象者全員が「参加前より深まった」と回答していた。

4. 講演会前後におけるSD法によるゲイに対するイメージの変化について

ゲイのイメージに関する因子構造：分析結果を表3に示す。因子分析に先立ち、Cronbachのα係数を算出し0.75と高い値を示し、データの信頼性が確認された。因子分析は最尤法を用い、プロマックス回転をおこなった。因子抽出基準は固有値1以上として因子を抽出した。その結果、3因子が抽出された。適合度は0.24と因子構造が妥当であることが示された。3因子の累積因子負荷量は54.8であった。SDスケールの「自由な－不自由な」項目において第1因

Table4 学生群、成人群の講演会参加前後における各因子の平均および標準偏差

因子	得点範囲	学生群 (N=41)		成人群 (N=13)		群の主効果 F (1, 52)	講義前後の主効果 F (1, 52)	交互作用 F (1, 52)
		講演会参加前	講演会参加後	講演会参加前	講演会参加後			
危険さ	3~21	11.37 (3.32)	9.44 (2.93)	11.15 (2.70)	9.85 (2.70)	0.01	22.42*	0.82
身近さ	4~28	18.37 (3.94)	14.17 (3.08)	19.08 (1.80)	15.69 (3.23)	1.42	56.54*	0.43
幸福さ	2~14	6.85 (2.71)	6.05 (2.34)	7.00 (2.24)	6.46 (2.50)	0.17	3.13+	0.12

数値はM (SD) : 数値が低いほどポジティブ、高いほどネガティブなイメージを示す

*:p<.05, +:p<.1

Table5 講演会前と後で意識が変化した点 (自由記述より)

変化した点	人数	変化した点に関する記述の内容
知識	19	性は多様であること、同性愛者の人数が思っていたより多いこと、同性愛は自己決定できるものではなく自然になってしまうもの、同性愛には不自由さがあること、同性愛者への対応などについて学びを得る
親近感	17	同性愛者を身近な存在に感じる
共感的理解	6	同性愛者の苦悩や生き方を受け入れ理解しようとする
尊敬 (尊重)	2	同性愛者の生き方への意志の強さやカミングアウトすることでゲイやHIV支援に携わる勇気を感じ尊敬する
問題意識を持つ	3	自分が今まで持っていた同性愛に対する偏見や固定観念に対して問題意識を感じる

Table6 講演会で得た学びの今後の活かし方

学びの今後の活かし方	人数
人も性も多様であることを認める	9
同性愛者を尊重し、理解ある態度で接することができる	33
友人・他者にも同性愛者への関わり方や理解を伝える	3
LGBT理解のための社会啓発活動への意欲	3
同性愛者のすべてがまだ理解できてはいないがその入り口に立てた	1
どの相手に対しても最初から異性愛、同性愛を決め付けて話さないよう意識する	1
同性愛による性感染症者に対するフォロー体制作りへの意欲	1
同性愛による性感染症などの危険性に対する知識を深めることへの意欲	1

子と第3因子における係数がほぼ同値であるが、本研究では尺度の構成を目的とせず、イメージ構造を検討することが目的であるため、さらにはデータの情報量を維持するために第3因子の項目として扱うこととした。第1因子は危険さ、第2因子は身近さ、第3因子は幸福さとした。因子間相関では危険さと身近さの相関が高かった。

学生および一般の講演参加前後のゲイイメージの変化：因子分析の結果に従い、それぞれの因子ごとに各項目得点を合計し、分析対象とした。平均値、標準偏差および分析結果を表4に示す。3因子すべてで学生群と成人群の主効果および交互作用は認められなかった。しかし危険さと身近さの因子で講演会参加前後の主効果が認められ、講演会参加後の得点が有意に低かった (危険さ：F (1,52) =0.01,p<0.5；身近さ：F (1,52) =1.42,p<0.5)。幸福さ因子では有意な傾向差が認められ、講演会参加後の得点が低い傾向が認められた。

5. 講演会に参加する前と後で意識が変化した点

講演会に参加する前と後で意識が変化した点について、講演会参加後に自由記述で回答を求めた。回答者の中には前と後で比較して記述している者もいたが、後のみについて述べている者もいたため、今回は参加後の意識の変化に着目した。結果を表5に示す。

6. 講演会での学びが今後どのように活かせるかと考えるか (講演会参加後に自由記述で調査)

講演会での学びが今後どのように活かせるかと考えるかについて、講演会参加後に自由記述で回答を求めた。結果を表6に示す。

IV. 考察

1. 講演会に参加してみたいと思った理由について

講演会に参加してみたいと思った理由は、「世の中の話題性への関心や参加の気軽さ、受動的態度」、「同性愛に対する知識欲や関心の高さ」、「自身や友人が同性愛者であることによる知識欲の高さ」、

「仕事に関連した知識欲の高さ」、「同性愛に対する、自身の偏見への問題意識や社会への啓発活動意欲の高さ」の5つのカテゴリーが得られた。まず「世の中の話題性への関心や参加の気軽さ」であるが、学内で今回のような講演会を実施する利点は、授業時間の空き時間を利用して学生が参加できるということであろう。学外で有用な研修会は数多く開催されているが、そこに出かけて行き参加する時間や意欲まではないという学生にとって、学内での開催は同性愛に対する関心を引き出し、知識や理解を深める一歩と成りえる。この一歩を学内で踏み出せる手軽さというのは貴重であろう。他のカテゴリーとして「同性愛に対する知識欲や関心の高さ」、「自身や友人が同性愛者であることによる知識欲の高さ」、「仕事に関連した知識欲の高さ」といった知識欲の高さに関するものが見出された。知識欲の元となるものは自身や友人が同性愛者という自己・他者理解や、仕事に活かせるというよりよい支援方法の模索、また同性愛そのものに対する関心であろう。今回のような講演会に自身あるいは友人が当事者であるという対象が参加することは大きな意義があると考えられる。宮腰 (2012)¹¹⁾は、LG者に対するインタビューから、セクシュアリティの受容に向けて、インターネット・雑誌・後援会・テレビといったメディアから情報を得ることで等身大の当事者像を得ることが出来ると述べている。しかし同時にセクシュアリティに気づき始めた当事者にとってメディアによる偏ったゲイ、レズビアン像（ニューハーフ、おなべ、オネエキャラなど）に同一化することは難しいことを指摘しており、自身のセクシュアリティに気づき始めた同性愛者は、外見や言動において「異性愛者と同じ」同性愛者と出会うことで自己受容を深めていくと述べている。そのためにはメディアや自己イメージの中の虚像としての同性愛者像ではなく、実像としての同性愛者との出会いが重要となってくると論じている。また、LGBTにとって自己が承認されるコミュニティに所属する重要性を論じた研究もあり、枝川ら (2011)¹⁰⁾は、レズビアンの語りから、高校生時に自分と同じ性指向を持つ仲間がいなかったことから周囲の誰にも明らかにできない孤独感を抱えていたが、高校を卒業してからレズビアンのコミュニティに所属する自分を得たことが集団への帰属意識をもたらした、社会的欲求を満たすことが出来たと分析している。そしてLGBTの当事者

が自己を語るということは、「性自認が明確になった自分」という確固とした枠組みを持っていることを意味すると述べている。これらのことから、自身や友人が当事者であるという対象にとって、今回のような講演会で当事者が人生を語る姿を目にすることは生き方のロールモデルとなり、特に普段カミングアウトしていない者にとっては自己が存在していることに対する受容感に結びつくと考えられる。また講演会が当事者および友人にとって主要なコミュニティである大学内で行われるということは、セクシュアル・マイノリティが排除されていないという安堵感に近い感情をもたらすと考える。また同時に、講演会に多くの参加者が自由意志で参加することは、セクシュアル・マイノリティに対して理解を示そうとする態度でもありと考えられ、その複数人の他者の姿は、当事者や友人にとっては、広い野原に1人であるわけではないという感覚につながると考える。

2. ゲイに対する理解の深まり

講演会参加後にゲイに対する理解がどの程度深まったかについて、「参加前より深まった」、「参加前と変わらない」、「その他」から選択させた結果、分析対象者全員が「参加前より深まった」と回答していた。これについては、もともと同性愛に対する関心がある程度あり、同性愛を理解しようとするレディネスが備わっていたために講演会の内容は参加者にとって学びの深いものになったと考えられる。これが授業や強制参加となると結果が異なってくる可能性がある。

3. 講演会参加前後におけるSD法によるゲイに対するイメージの変化について

危険さ、身近さ、幸福さの3つの因子すべてで講演会参加後に変化が見られ、講演会参加後は、危険さが減少し、身近さと幸福さが増加した。また学生と成人では3因子に有意差は見られなかった。このことから講演会を行うことで偏見やスティグマによるイメージの変容が期待できることが示唆された。同性愛の歴史について平田 (2014)¹¹⁾は、現代の日本にみられるホモフォビアは、大正時代1920年頃に生じた日本人のメンタリティの西欧化に由来する部分が大きいと述べている。そして現在、欧米ではドメスティック・パートナー制度（法的な婚姻関係にはないパートナー同士に対して、法的な婚姻関係と同等の権利（“の一部”）を保障するために設けられた制度）や同性婚などの法制度が整備されつつあり、

ホモフォビアの影響力を払拭しようという動きがさかんにみられるのに対し、日本ではいまだに大正時代的なホモフォビアが根強く残りはびこっているように思えると指摘している。また石丸(2008)¹²⁾も、LGBの若者は同世代からのいじめや身体的・言語的暴力にさらされたり、家族から拒絶されたりなどの特殊なストレスを受けることが多く、また同性愛に対する偏見の存在する社会では同性に性的魅力を感じることに自己受容ができないことも多いと述べている。一方で鈴木ら(2015)¹³⁾のように、欧米に比べて日本では男性の自尊心において性指向が異性愛であることの重要性が相対的に低いという点や、日本では同性愛者に対して偏見を示すことは良くないといった規範意識が偏見表出への抑制として働いている可能性も報告されている。本研究でも講演後では3つの因子すべてにおいて統計的にはポジティブに意識が変化したが、その得点範囲を見ると、講演前が極端にネガティブともいえず、また講演後で極端にポジティブになったともいえないものであった。まず講演前が極端にネガティブではなかった点においては、今回の講演会の参加者がそもそも同性愛に対して関心を持っていたり理解したいという心の準備性があるためネガティブな偏見はなかったとも考えられる。しかし、同性愛に対する偏見については今後も継続して検討していく必要がある。一方で、3つの因子の得点が講演会参加後も大きくポジティブにならなかったということは、1回の講演会で個人の意識が大きく変わるというよりは、意識の変容の入り口の提供にすぎず、その後は個人内で考えたり他者と話し合うことを通して、同性愛に対する適切な意識を自分のものにしていくことに任せることになるということかもしれない。講演会を1回で終わらせるのではなく、複数回開催するなど多くの対象に参加できるチャンスを増やし、意識を定着させる取り組みは必要であろう。

4. 講演会に参加する前と後で意識が変化した点

講演会に参加する前と後で意識が変化した点として、「尊敬(尊重)」、「問題意識を持つ」、「共感的理解」、「親近感」、「知識」という結果を得た。今回の講演会の構成として、当事者による同性愛者に対する対応の仕方の講演会や同性愛者として生きてきた人生の振り返りについて当事者2名による対談によるフリートークが中心であった。参加者は考察の1で示したように同性愛に対して知識欲や関心は

高かったため、講演会はそれらを満たすものであったであろう。つまり、講演会を聞き「知識」を得て、さらに当事者の人生の振り返りを聞き当事者の人生観に触れ「親近感」が生じ、語られる同性愛であることによる苦労や困難さに対して「共感的理解」をし、苦労や困難を抱えつつも生き続け、さらにはカミングアウトすることでゲイやHIVの啓発活動に結びつける態度に「尊敬」の念を感じ、自身のこれまでの同性愛に対する偏見に対して「問題意識を持つ」といった体験が起きている可能性がある。もちろん参加者によって上述した変容すべてを体験しているとはいえないが、講演会において知識の提供だけではなく、当事者の生き方や考え方に触れることは参加者の理解を大いに深める機会と成り得るだろう。

5. 講演会での学びが今後どのように活かせると考えるか

講演会での学びが今後どのように活かせると考えるかについて、「人も性も多様であることを認める」、「同性愛者を尊重し、理解ある態度で接することができる」といった性の多様性の理解や同性愛者への適切な対応や、「友人・他者にも同性愛者への関わり方や理解を伝える」、「LGBT理解のための社会啓発活動への意欲」といった他者や社会に同性愛に関して正しい理解を求める態度などが見受けられた。性の多様性の理解や同性愛者への適切な対応といったものは自己の心構えや態度に関するものであるが、他者や社会に理解を求める態度というのは第三者に自己の理解や心構えや態度を発信していくものといえる。このように1回の講演会の実施によって、一人の自己の同性愛についての理解の広がりや他者へと広がっていき、さらにまた他者から他者へ広がっていくという形で少しずつ社会に浸透していく可能性が期待される。

謝辞

講演会当日、ご自身の体験を誠意を持って話してくださいました当事者2名の方に心より御礼申し上げます。また、講演会の開催にあたり多大なご尽力をくださいました山口県山口健康福祉センターの保健師、蔵本真理様、澄川幸子様、橋本優子様へ深く御礼申し上げます。

引用文献

1. 宮腰辰男：セクシュアル・マイノリティを生きるということ－同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス、カウンセリング研究所紀要、35、63-77、2012.
2. 石丸径一郎：性的マイノリティとトラウマ、トラウマティック・ストレス、6 (2)、129-136、2008.
3. 西成 寛・松本洋輔・岡部伸幸・内富庸介：性同一性障害とセクシャルマイノリティーに関する医学部学生の意識調査、GID（性同一性障害）学会雑誌、5 (1)、222-224、2012.
4. 松本洋輔：診療の秘訣 セクシャルマイノリティーへの意識と対応、modern Physician、33 (10)、1301、2013.
5. 山本章加・大蔵雅夫・重本津多子：パーソナリティとイメージが同性愛者に対する態度に与える影響、徳島文理大学研究紀要、84、85-91、2012.
6. 河部房子・山本利江・高橋幸子・和住淑子・青木好美：当事者参加を取り入れた看護過程展開の演習の企画・実践報告、千葉大学看護学部紀要、29、43-48、2007.
7. 森川三郎・中谷千尋・野澤由美・渥美一恵・小澤政司・角田旭・古屋妙子・水上みや子・藤原忠：医療関係者と看護学生の子精神障害及び当事者に対する捉え方－「べてるの家」の山梨講演会を通して、山梨県立看護大学短期大学部紀要、9 (1)、75-87、2003.
8. 岩下豊彦：SD法によるイメージの測定－その理解と実施の手引－、東京、川島書店、1983.
9. 井上正明・小林利宣：日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観、教育心理学研究、33 (3)、253-260、1985.
10. 枝川京子・辻河昌登：LGBT当事者の自己形成における心理的支援に関する研究－ナラティブ・アプローチの視点から－、学校教育学研究、23、53-61、2011.
11. 平田俊明：第6章日本における「同性愛」の歴史、セクシュアル・マイノリティへの心理的支援、針間克己・平田俊明編、岩崎学術出版社、73-82、2014.
12. 石丸径一郎：性的マイノリティにおける受容体験と自尊心－カミングアウトの効果に関する実験的検討－、コミュニティ心理学研究、9 (1)、14-24、2008.
13. 鈴木文子・池上知子：異性愛者のジェンダー自尊心と同性の同性愛者に対する態度 社会心理学研究、30 (3)、183-190、2015.